



なついろ



葉

なついろ

風に撫でられる稲は、あまい青を残したまま漣を起こす。自動販売機の掠れた赤い側面に安堵。剥げかけた塗装はいくらか黒ずんでいて、子供らの蹴ったサッカーボールに凹みを見せていた。
瑞々しい葉脈があつい太陽に照りつけられ、焼ける。私の指先から、ほたりと重力に乗った汗が背の低い向日葵の顔を濡らした。

極彩色。逃げ水。黒に霞む花火の残照。虫取り網に琥珀。

渴いた足場に、鼓動が聞こえる。

密やかに唇を重ねて、さざなみ

湿っぽいのは、梅雨のためだけではなく。かたつむりの巻き模様がぐるぐるとうごめく。低い空と迫り来る地面に挟まれて、人々はまるでハンバーガーのパティ。雨脚は相も変わらずはたはたと土に飽和してゆく。

季節外れの麦わら帽子は色を帯びてまるでカラメル。クロッシェのカラフルな花がちょこんと彩りを添えている、真夏の帽子を斜めに被り、彼女の気分はエイティーズの有名海外女優。首元の大きな黒子以外に個性はなく、中肉中背の普通の女。たった一つ人とは違うのは、この仰々しくも美しい不可思議な雰囲気だった。真っ黒なレインブーツが跳ね、水溜まりが波紋に揺れた。

青青とした木々に微笑みかけながら、彼女は先へさきへと進む。人通りのない道をぐんぐんと。

あら、と見つけた一人の男。赤い傘を黙ってくるくる。

肩を濡らした彼女は駆ける。甘く息を切らせながら。

等身大が見えた瞬間にシルエットは濃い一つとなった。風で大きな水溜まりが波を起こして二人の唇を近づけてゆく、重なる影に濡れたアスファルト。

歌うような、ただいま、だけがやけにはっきりと聞こえる。

まぶたとろけて

肌ふたつをすり寄せて、手のひらに包むきみの頬。睫毛を指の腹で撫でればくすぐったいわと喉を鳴らす。汗の滲む額は髪の毛を貼りつけ、首筋からは肺を温める人の匂いがする。窓のふちに漏れたひかり。遮光性の低いカーテンに時折触れる車のライト。ぎちりと揺らしたスプリングは三年間、ふたりの存在を支え続けて、重なった肩にぬるい吐息が零れる。まるで互いが海を泳ぐ蝶のように鱗粉と酸素を撒き散らして。唇は唾液に濡れてなお渴いている。煽られる風鈴の硝子がからら、ころろ。目蓋は重たいのに、扇風機に女の髪はやけに乱れる。

裸足、アスファルト

グラウンドから隔離された四角い大きな箱にたっぷりの水が入り、風のない日には地面のようにじいつとしている。わたしはこの、プールというものがよくわからない。

紺色のぺったんこが一斉に消毒液から這い上がる。ほんのたまにお掃除のときに嗅ぐいやな匂いから逃げるように思い切り蹴られた水面はいちめん泡だらけ。

じいこ、じいこと蝉のオーケストラにうんざりなわたし。右足の甲に有名なアニメのキャラクタのばんそうこう。ずれかけている。

準備体操の前にプールのそばで三角座り。お尻の下がごつごつとしていて、足は焼けるようにじいつとは、してられない。地面と足裏が触れるたびに化学反応。這い上がるおおきな黒蟻にも気づかない。

今日の体温は37.6℃。

体操を終えたみんなが足からざばんと一気に入る。

わたしだけ、ひとりきり、日陰で影を見送っている。

裸足、アスファルト。陽が当たらないじめじめで、わたしの足はやけどしない。

雨のまにまに

彼女は傘を差すことすらせず、ブラウスを湿らせていた。睫毛が重そうにだれている。

天地の境は曖昧となり、鈍色の雲が動けずに低い屋根を押し潰そうとしていた。滲んだ紫陽花が雨粒にかすかに揺らぐ。

昨夜の気象予報によれば今日から梅雨入りらしい。しっとりと殻を濡らしたかたつむりがブランコの上で歩を進める。剥げかけた桃色に、かたつむりの幼い触角は不安げに縮んでいる。彼女が腰掛ける隣のブランコの鎖ががしゃり、と静かに音を立てた。

「ほんの少しだけ、夢のまにまに」

唇が震えた。雨とともに降り注いだ。

彼女の言葉だった。

ショートヘアの毛先からほたり、ほたり、こぼれ続ける水滴は砂の上で跳ね上がりちりぢりになる。

鉄の匂いのまじる指先に水色のマニキュアがっそう存在感を強めている。

露わになった白い膝が冷たい。彼女の頬の筋肉は弛緩して、穏やかに。

アオガエルが目を細めて、華奢なサンダルの横で首を傾げた。

瑞々しい背をゆったりと上下させるさまを見て、彼女の目尻がゆるりと上がる。

「ほんの少しだけ、雨のまにまに」

まにまに、幻想が錯綜する。